

一応、題を「東アジアの過去・現在・未来」といたしました。序論として二つの事に触れたいと思います。

東アジアの視点から中国を眺め、日本を眺め、韓国と眺めるということですね。今我々が歴史の教科書を作るとすれば、日本は日本を中心として、韓国は韓国を、中国は中国を中心として、歴史を叙述しているんですけれども、それを超えて東アジアという視点から見ていけばどうであろうか、ということを考えています。ヨーロッパでは既にヨーロッパ史を共に考え、共に学び、共に教えるという時代でありますので、我々も東アジアにおいて、東アジア史を考えなければならない時代が目の前にきているという風に思うからであります。



まず序論として、二つの事柄について触れてみたいのですが、まず、大雑把に東アジア史を展望してみたい。そして、これからの将来がどうなるべきかということ私なりに考えて、問題提起を出したいと思いますので、どうぞ、そういう観点から、皆様からも、問題提起していただきたい、批判していただきたいと思います。

第一点は、東アジアにおける、前近代的めざめ。前近代的めざめとして、私は朝鮮史の立場から、「文禄・慶長の役（韓国では「壬申・倭乱」と呼んでいますが）」、「壬申・倭乱」のことを考えてみたい。これは東アジアにおいて、近代に入る直前において、中国と韓国と日本が衝突した時点であろう、そして、衝突した場所というのは、朝鮮半島において衝突した、このような図式であります。それで、ずっと後になってですが、中国において、1840年から1842年、アヘン戦争が起きる。このアヘン戦争は今から166年前であります。これは、「壬申・倭乱」というのは、414年前、1592年から1597年まで（7年戦争）でありますね。1958年には日本の豊臣秀吉軍が撤収してしまうという事件であります。これは、いわば、日本と朝鮮の衝突であります。そこには中国の明も参加する。歴史적으로よくいわれるのが、この戦争によって、明は非常な打撃を受けて、ゆくゆくは明も滅ぼらなければならないという原因のひとつにもなった、大事件であります。

これをどう解釈していいのか。日本はアジアにて、朝鮮を経て、中国にまで侵略しようとした。これは、近代以前における、日本のアジアへの侵略であった。それと同時に、既に鉄砲が入って来て、西洋でスペインやポルトガルが植民地を持ったように、日本は、アジア大陸のほうに歩を進めたい、という事件です。これに対して、私は詳しく述べるのではなくてですね、これを今日の時点で解釈してみるということが言えるのではなかろうかと私は思うのであります。これはトインビーの有名な理論「ネメシスの理論」で解釈してみたい。ネメシスというのは復讐の女神であるわけですね。いわば、東アジア全体の文明圏において、日本は周辺であった、marginであった。周辺であったものが、この文明の中心に向けて、攻撃を繰り返すわけですね、だから、これが復讐である、ネメシスである、という性格を持つわけです。これが、1592年に始まった「壬申・倭乱」でありますけれども、そして、それに朝鮮はもちろん、明までも、中国までも関わって、大戦争になって続くのあります。それから、これに失敗した後、日本は当分間、徳川時代の間じっとして、比較的アジアとの関係において、良い関係を持ちながらじっとしていますけれども、段々ともう一回、アジアを侵略していく。だから、私はこういう意味においては、徳川時代というのは、日本のアジアへの侵略という矛先を当分おさめていた、潜在的である、いわば、潜んでいた時期である思うのです。そして、次に、明治以降になって、日本は次の攻撃を始めるのであります。それで、日本の近代教育においては、その度に、日本の近代そのものが、アジアへの侵略であるがために、それを試みようとするがために、常に豊臣秀吉を、英雄化しようとするような傾向を、ずうっと日本の近代教育は続けてきた、ということが言えると思います。アジアの侵略において、実際は挫折して日本に帰ったにも関わらず、それを勝利の歴史として、明治以降の日本が受け継ぐべき勝利の歴史として、これを回想しようしてきたのであると言えるのでないか。しかし、我々は、今はっきり言えることは、この二つと、「文禄・慶長の役」と日本の近代・明治以降におけるアジア侵略とともに、失敗したものである、歴史的な失敗であると、我々は振り返ってみながら、これは実は「アジアの悲劇」であったと思わざるをえないわけです。今、東アジアにおいて、日本に対して、反日的な傾向があるということは、実は、歴史的に言えば、この二つの事件、アジアの侵略が重なって、日本への批判として、アジア日本への、ある種の潜在意識的な恨みとして、残っていると見ていただこうと思っているわけです。

これが実は、アジアのなかに共通意識として、潜在的な形の中で残っているということをおし上げておいてですね、これから、序論の第二のところをおし上げたいのですが、それは、ドイツのランケ史学について触れてみたいと思います。良く言われる

ように、ドイツのランケは、近代史学の父である、と言われる訳ですが、彼は1795年から1886年まで(生きた)ですが、日本語に翻訳された本のなかに『世界史概観』という本が出ています。これは、実際は、原題は『近代史の諸時代について』と言います。(中略)この本が出たのは、アヘン戦争の12年後です。これを念頭に置いていただいて、彼の根本的な歴史観というのはどういうものであったかという問題がありますが、彼はこういうことを言っています。「この地球上において、若干の民族は他の民族に優越する勢力を賦与せられ、こら若干民族がもっぱら他の民族に対して影響を与えている、だから大きな国があって、その大きな国が他の小さな国々に影響を与えている。」それゆえにわれわれの目標は……歴史においてずばぬけた活動を示した諸民族そのものにむけなければならない。世界史は強大な国の歴史であると言っているわけです。非常に国家主義的史観がここに流れている訳です。これを第一に引用しまして、それを日本にとってどういうことになるかといいますが、次の言葉ですが、「私は私のフランス史の中に、偉大なる征服者とは同時に文化の伝搬者たる人であると言ったが、実にシーザーの卓越していたのはこの点においてであった。」いわば、征服した民族が、征服しながら文化を伝えるから、だから、征服したことよりも文化を伝えたことが、一撃大ではないか、こういうような発言をしている訳です。

そこで、ゲルマン人を賞賛しているのですが、ゲルマンには主従制度があるのですが、ローマ人の間にもあったのだけれども、ローマは実力者によって追い出されていったので、この制度が形だけ残った、「形骸化して血の通ったものになうことはなかった」と言っているわけです。それが、残っている、その制度が生き生きとして残っているのが、ゲルマン民族においてであるのです。「これに反しゲルマン人においては、この一切を貫く忠誠の絆こそ、太古からの王制と独特な軍隊組織とを通して、その近代史の全部を、いままでありしほどきものまでに特徴をつけたのである。」これは、アジアで言えば、日本における主従制度でしょうね。一番封建的な制度が続いたのですから。だから、日本の近代史学というのは、このドイツ歴史学の祖と言われるランケをそのまま引用してきたというものは、当然あり得ることでしょうね。これは、広辞苑に書かれていることではありますが、「その学風は門弟リースを通じて日本にもおよび、アカデミズム史学を基礎づけた。」だから、日本の歴史学は、ランケからリースへと、そして日本へと続いて来たものであると言っているわけですね。そして、このランケが『世界史概観』のなかでアジア史をどうみているか、一箇所だけ引用してみたいと思います。「例えば、アジアに目を向けてみよう。我々はそこに文化が発生したこと、まだこの大陸がいくつかの文化団体を持っていたということを知っている。(略)歴史の動きは全体としてむしろ退行的であった。歴史の動きは前進しないで、退いていったのであると。ヨーロッパの重要な思想の中にあるアジアの史は、退行的であった、あるいは、停滞してきたという考え方ですね。「アジア文化においては、最古の時期がかえって全盛期であって、ギリシャの要素やローマの要素の盛期にあたる第二、第三の時期には、すでにそれは大したものではなくなっていた。そして蛮族—蒙古族—の侵入とともに、アジアの文化はまったく終末を告げたのである。」蒙古と同時に、アジア史は終末を迎えた、これが西欧人のアジア史の見方であったと言わざるを得ないですね。未開時代に立ち返った、というのがアジアの歴史であると。「当時の東洋に瀰漫していた野蛮は、現今においてもなお支配をつづけている。」また、今日においても蒙古によって支配された野蛮が続いている、これがアジアだというように説明しているわけです。私は、日本の方にはすまないんですが、日本の近代化は、この歴史観に同調したものである。日本は西欧の文明を受け入れたがために、文明国であり、アジアは野蛮である、これが文明国における日本のアジア史観であったと思わざるを得ないのです。これに対して、現代的な解釈を置き加えたいと思いますが、女性の哲学者でハンナ・アレントという人がいます。アレントが、『全体主義の起源』という有名な本を出しています。この本でアレントはこういうことを言います。世界の帝国主義を、いわば、スペインやイギリスあたりまでくる帝国主義を、第一次帝国主義と彼女は考えます。それから、今度はドイツやイタリア、それに学んで日本、これを第二次帝国主義と言います。だが、第一次帝国主義と第二次帝国主義のなかで重要な相違は何かと申しますと、第一次帝国主義は未開の国、アフリカの国へ行った。だが、第二次帝国主義国家は、同じ地域の文明国に入って行った。ドイツはヨーロッパを支配しようとした、日本はアジアを支配しようとした。しかし、アジアは伝統的な文明を持っている国であるにもかかわらず、それを野蛮と見なしてアジアのなかに入っていた、と考える事ができるわけです。(ここで、詳しいことは申し述べませんが、そういった帝国主義に対する解釈があるということも申し述べて、残りはどうぞ本を読んでいただきたいとおもうわけです)

第二の項目に入りまして、今までの東アジアの歴史を、私は、東アジアの不在の歴史だと申し上げたいと思います。これをテーマでこれからお話申し上げたいと思います。1919年の韓国(朝鮮の)3.1独立宣言というのがありますが、そのなかで、

それを書いた人は崔南善というわづか当時29歳の人でありますけども、そのなかに次のような言葉があります。「朝鮮を武力でもって威力で支配することは決して東洋の永久平和にはならない」東洋の安危の主軸である、4億万中国人のなかに日本に対する危惧があるとすれば、これは決して東洋平和ではない、ということを行っているのです。それは、東洋全局の、共に倒れ、共に滅ぶ悲運の道である。それにみわまれることは迷惑であると。「今日吾人の朝鮮独立は朝鮮人をして正当な正栄を遂げしめると同時に、日本をして邪路から出て東洋支持者としての重責を全うせしめることであり...」だから、今は独立運動はするけども、それは単に朝鮮の為のみではないんだ、東洋全体の支持者として日本が立つことを願うのであるということを行っている。そして、同時にそれは「中国をして夢にも免れえなかつた不安恐怖から脱出しようようにすることであり、また東洋平和をその重要な一部とする世界平和、人類幸福に必要な段階となさしめることである。これがどうして区々たる感情上の問題であろうか」これは、単に日本に対する感情の問題ではない、東洋が生きるためには、中国から日本に対する恐怖心が無くなり、中国と朝鮮と日本が共に、世界平和、人類後継に貢献に道しかないんだ、これが我々が行くべき道であると示しているのであります。私は、しばしばこういうことを考えるんですね、私の哲学の一つですが、「支配者の言葉よりも、支配され、虐待されている人々の言葉のほうが真理に近いではないのか」こういう思いを私はしているのであります。いわば、こう言って良いと思います。3.1独立宣言の中には、近代におけるアジアの不在を嘆いている。日本がアジアを支配することによって、アジアが不在になるのだ。それが、普遍的思想になるわけですね。

(中略。テープ交換)



日本周辺諸国、韓国、中国の人々は西洋を勉強しようとするが、西洋は日本に比べて遥かに遠いわけですから、日本に行って、日本が受け入れた西洋を勉強するわけです。しかし、日本に行った多くの学生は、日本の古事記や日本書紀を勉強した人はほとんどいない。勉強したわずか2、3人の人がいるんですが、皆親日になる。しかし、今日は、日本に行って日本書紀を勉強する、日本のあらゆるものを勉強するという人がいる。この図式は、以前とは非常に違う時代になってきたことを思わざるを得ない。こういう近代以前の姿が、どういうふうであったか、もう一度振り返ってみるとですね、皆が、近代以前において、中国を学ぼうとする。だから、例えば、中国においての、日本とか朝鮮に関する

ことはほとんど関心がない。朝鮮においては、徳川時代に日本に通信書を送っていますけれども、中国に関するものであって、それは朝鮮のことではない。こういうように、アジアにおいて、文明の中心である、アジアの中心である中国に対する関心はあっても、朝鮮に対する関心はない。また、中国においては、日本に対する関心がない。いわば、日本における朝鮮の不在、アジアにおける朝鮮・日本不在の時代が続いて近代に入っていった、と言わざるを得ないわけですね。だから、ここで、明確に我々が考えられることは、一国主義的な時代においては、アジアは不在である、ということですね。それから、今度はそれ以降の話をちょっと見ていこうと思いますが、日本における朝鮮不在について例えば申し上げますと、日本のいろんな政権達を書いた本がありますけれども、そのなかに「唐」という言葉がでますね。「唐」という場合にはそれは東部を指したり中国を指すわけです。

それで、朝鮮も指す場合にも「唐」というのです。それは、朝鮮というのは、彼らの眼中には不在であった、ということがわかるわけですね。私がここで申し上げたいのは、弱い国は、アジアにおいて弱い国は、不在であるのではない。我々は、弱い国に対する痛みを感じるアジアにならなければならない。弱い国がどうすれば我々と同じように栄えて、同じように文明を交換しあうような状態に入るか、ということ我々は考えなければいけない。かつては、弱い国を切り捨てた。しかし、今日においては、弱い国を含み込むための時代、そういうアジアを見せていきたい、と我々は思わざるを得ないと思います。今申しましたように、中国を中心として日本は近代以前の時代を考えたわけですが、そこで、いろいろな文書を見ればわかることなんですが、その一つにジャンセンが書いた『日本二百年の変貌』のなかに書いてある文章ですが、「それ朝鮮・琉球の属の如き、中華を去ることははなはざ遠からず」だから、これは朝鮮や琉球というのは、中国を知ればそれを知る事であって、特別に朝鮮や琉球を知ろうとする必要はないんだ。「その書もまた同文なり」書いている文章も中国と同じである、だから見本として中国を考えればいいのであって、朝鮮や琉球を考える必要がない、ということになります。それで、それが近代においてどうなるかと

ということで、プリンストン大学の日本学教授であったマリウス・ジャンセンの言葉を引用しますと、それは『日本と東アジアの隣人ー過去から未来へ』という1999年の本のなかに文があります。朝鮮の使節が、修信使として日本に行くわけですね、そうすると日本人はその修信使に会おうと思って、皆たかってくるわけですね。それが近代になると、1876年以降、朝鮮の修信使が日本に到着すると、全然かつてとは違う、ということはこの文は書かれている訳ですね。「ほぼ3百年近く、平和な関係になった隣国(朝鮮)そして文化と教養の高さで日本人を感銘させるようなエリートによって統治された隣国があれば急に一転して日本人の怒りと軽蔑を対称と化して、それまでの敬意が吹っ飛んでしまったのは一見驚くべきである」徳川幕府の時代に中国の文化を持ってくると思いながら、朝鮮の使節に示していた敬意は、明治初期になると素早く捨てられてしまう」と言っている訳ですね。それで、その当時の、1876年以降ですが、朝鮮修信使団が東京に到着するわけですが、その到着した時を目撃した外国のジャーナリストが記録した言葉のなかに「正装した使節一行の厳粛な市中行進は、見物人の野次と嘲りの対象となり、『おそらく威風堂々の極致を示そうと用意したはずの装束や持ち物も、物見高い人ばかりと彼等の嘲笑を招くだけだった』」

だから、その以前において、日本は中国や朝鮮の文化に対する考えや考え方が全く違う。それで、向こうの使節がやってきて「威風堂々」と歩いていると、かつてはそれに対して敬意を抱いたけども、今やそれに対して嘲りの言葉しかない、こういうような時代に明治以降になって変わっていくことです。これが近代日本における、アジア観だった、と我々は言わざるをえない。だから、私は、このアジア不在の歴史が続いたんだと言わざるをえないんですね。そして、遺憾ながら、戦後においても、日本において東アジア不在の歴史は続いたのである。それは何故かということ、アジア全体において、アジア不在だったんですね。日本とアメリカの関係だけは存在する。韓国だって、韓国とアメリカだけの関係が存在する。中国の関係も存在しない、日本の関係も存在しないという時代を我々は経験しているわけですが、私は、1965年12月に初めて日本を訪問して日本旅行をしたんですが、そして私も実は、1965年に日本に来て、初めて日本を発見した。1945年の一年間は日本人とともに学校で教えたりににもかかわらず、私の中では日本は不在であった。それで、ようやく、日本に来て初めて日本を発見した経験をします。

そして、同志社の大学に言ってしゃべったんですけども、同志社の学生達が「日本はアジアについて考えてはならない、過去のように罪を起こすからだ」と言うんですよ。それで、私はなんと言ったかということ「私はアメリカ、ヨーロッパを通過して、東南アジアを経て日本に来たけれども、バンコクで、1965年頃、空港に降りて一番大きな広告は何なのか知っているのか？それは味の素だ。これをどうするつもりなのか」と。「もう既に日本はアジアに存在している。だから我々は、日本とともにアジアをどう考えなければならないかを真剣に考えなければならない。これが現実だから。これが現実であり、ここから出発して、未来のアジアが展開されるのだから、我々は真剣にアジアを考えなければならない」それを盛んに日本の若い人たちに対して弁明をしなければならない」と言った記憶があるわけです。東アジアの復権と言いましょうか。不在になれば、我々の意識から、ある一国に対してですね、不在になる。ある一国のことを知らない、関心を持たない。そうしながら、ある意味では、ある一国に対しては敵意を持つ。敵意も持つ故にある一国とは関係をしないということになるとすれば、必ず、さっき申しました、ネメシスが起る。我々が日本を排除して、日本を考えない、そして日本との関係を真剣に考えない、そうすると、必ず復習が起る、ネメシスが起る。歴史のなかにおいてネメシスが起る。こういうように、我々が考えるべきではないかと私は思うのです。そういう身において、お互いが、東アジア発見の時代、これから東アジア発見の時代ですが、いずれ、アジア三国がいかにかどう生きるかを過去を問うのではなくて、未来のために我々はそういうことを考えなければならないと思うのです。このごろ、東アジアの関係がいろいろ大変だという話をしますけれども、あまり心配しないほうがいい。なぜならば、もう既に、毎日1万人の普通の市民が??する時代ではない。だから、歴史教科書の問題がアジアの関係全体を支配することはできないんだ。段々とそれは、後ろのほうに下がってしまうのである、だから心配する必要はない。だから、言えることは、私はあえて申しますと、政治によって支配される時代から、いかにすれば市民によって支配される東アジアを我々が作っていくか、これが我々の課題でなかろうかと思うのです。

そして、3番に入って、東アジアの現在をどう見るべきか。それで、未来への提起を致したいとおもいますが、4つくらいのお話をして終わりたいと思います。問題提起をして、共に東アジアのことを考えていきたいと思います。戦後の歴史を考えると同時に、我々は戦前の歴史を考えたから、軍勢力即国力と考えた。だから、軍隊を持っていないと国の力がない、軍隊を持つことがその国の国力である。これは中国もそうであるし、韓国も、南部朝鮮もそうである。これは戦争の経験から当然な発想である。あるいは、冷戦体制のなかにおいて、いわば、戦後の政治状況からいって、これは当然だったかもしれない。しかし、日本の

考えとはなんであったか。日本の繁栄というのは、その武力を持つことよっての繁栄ではなくて、武力無しの繁栄であった、ということをお我々が考える必要がある。これは、私は、東アジア全体において、これから考えざるを得ないと思います。韓国も中国も、この強力な軍事力を持つ事が力である、こういう考え方になっていったのですが、日本だけが例外で、軍事力を即国力とは思わないで、軍事力を持たないで日本が繁栄できることを証明したわけですから、ようやく韓国も中国も、軍事力だけが国力ではなくて、70年代から日本に学ぼうとする。軍事力以外のところに、経済力とか知的力とか、こういうものが真の国力だということをお学べと言っている。こういうような時に、日本がアジアに向かって何をいうべきか、それが課題である。日本は軍事力を持たないで、大事だと思わないで、国力を築き上げた、このモデルをアジアに見てほしい、というような日本人になったほうが良いのではないか。アジアの軍事力があるから、我々の軍事力を強大にしまおうとしてしまおうとすることが、果たして次の時代のアジアのためであるのか。こういうことを考えてほしいということをおまず申し上げたいと思います。

次の第二項目においては、東アジアにおける新しい力学的关系とはどういうものか、という問題ですが、私が今までずっと話したことは近代まで、いわゆる1945年以前における状況を説明したわけですが、私は、21世紀に入って、我々は新しい東アジアの力学关系に対する歴史的経験を持ち始めた、ということをお申し上げたいのです。これはどういうことかと申し上げますと、以前は東アジアにおいて中国が覇権も持ちました。近代に入って、日本の覇権の時代がやってきましたわけですね。中国、日本の覇権が終わって、これからどうなるのだろうか。これが、東アジアにおいてふたたび中国覇権を持つような時代になるのか。それを我々が目指すべきか。日本はそれに向かって、日本が覇権を持つ時代に向かうべきか。どうすべきか。どういような思考をすべきか。私は、こういうことは、東アジアの、中・日・韓において初めての歴史的経験だと思うのです。どこが、従属する形ではなくて、3つが同じ近代的発展をしながらこれからどのような関係を持つか。これが、新しい歴史的経験である、と私は思うのであります。この新しい歴史的経験を生きる道は、あまり具体的なことは、私は、知らないのですが、良く言われることが、競争しながら協力する。これしか我々の行く道はないのだと思うのです。あえて、私は、韓国側に立って、一言申すわけですが、韓国や朝鮮の役割は何かと。本当はこういう役割であってほしい。日中の中に立って、中日の中に立って、これを和解させ協力させる仲立ち役、媒介役ができないものか。こうすることによって、アジアに新しい連携の時代をもたらす、これがアジアが行くべき道ではないだろうかと思うのであります。



それでは3番目に入りまして、東アジアの政治的リーダーシップの問題をお話申し上げたいと思います。このごろ、日本では右寄りの政治的リーダーシップが大変問題になっているのですが、私はこれはダメだというふうに申し上げたいと思います。戦後においてですね、東アジア全体において日本の存在が非常に重要であるということをお、私はまず申し上げたいと思います。ヨーロッパにおいて戦争をしかけたドイツの役割が非常に重要であること、日本の役割が非常に重要であると、申し上げたいと思います。だが、今の日本の指導力に対して懸念を持っている。それを、日本がアジアのなかにおいて、アジアでいかに関わってきたことに対する思想が日本に欠けている。日本がヨーロッパにおけるドイツのような出発ができなかったことは私は十分理解している。それはどういうことかという、日本のなかにも問題はありますけれども、戦後においてドイツは分断されている、そういう不幸な状態において、非常に健全周辺国というのが存在する。だから、これとの関係をどうするかをお考えなければならないのですが、戦後において、これは遺憾ながら、東アジアにおいては日本は新しい現代の方向へ進んでいるけれども、中国は長いこと内乱であった、朝鮮は南北が分裂していた、この経験ですね。だから、日本の立場から見ると、アジアと協力しようと思っても協力できる状態ではないんだということが言える。これは、十分理解してですね、だから、今からの日本のあり方は重要だというわけです。なぜならば、韓国もそれなりに非常な発展を遂げて、中国はますます発展を遂げようという状態、こういう時に日本はどうあるべきかを考え直さなければならない、と思うのであります。だから、戦後の日本にとっては、フランスやイギリスのような存在はアジアにはなかった。そして、今は、韓国も中国も変わっていくなかにおいて、日本のリーダーシップがそれでいいのか、日本のリーダーシップは戦後、かえって後ろ向きになっているのではないか。だから、アジアにおいて、一国のリーダーシップはあっても、アジア全体のためのリーダーシップは存在しない。これが、現在の状況であるというふうに申し上げたいと思います。

最後の問題になりまして、私は、民主的な国民に期待するということを申し上げたいと思います。私は民間の間で、政治的競争するうちに、民間の若い人たちのために政府と政府の間の役割で大分活躍というか、努力してきました。そして、今日ような状態を見ながらですね、民間は韓国にやってくるのは、年間260万人の日本人がやってくるわけですが、そして韓国から日本へ行っているのは170万人くらい。このごろ、韓国は中国ブームで中国へ行っているのは400万近くも行っていますが、私はそれに対して日本が少なく、中国が多いと言っているのではなく、中国が広いから当然多いはずだと私言っているのですけれども、そういうふうに時代が変わっている。それで、政府間のことをやろうとして、教科書問題のためにそれを破ってしまう、そして、ある政治的指導者になると考えが違ってきてしまう。それでは、日韓関係ができないんです。こういうことを経験しまして、今、積極的に申し上げるのは、市民の行動の時代に入る。だから、政治家達の、あるいは政治勢力がやっていることは、彼らは協力することはするけれども、政治的に対立したからといって、我々市民の行動をやめてはならない。政治家が対立すればするほど、我々は市民の行動を展開しなければならない。そして、いつかは、ヨーロッパにおいてそうであるがごとく、我々が市民から入って、我々東アジアの共同権の問題を作っていくという時代を作らなければならない。でないと、いつも政治家を待っていて、そして我々が黙っていて、政治家の発言によって我々が左右されて、こういう時代はもう終わらせたい。これが、私が長いこと日韓関係をしてきて思うことです。それで、一番最後に私が申し上げたい事は、民主的国民への期待、市民への期待、ということを申し上げたいと思います。長い不幸な時代を超えて、これからはやはり市民が新しい歴史を作っていくべきだと思うのです。それで、私は、韓国の金大中前大統領と日本の小淵恵三総理が交流した時に、いろいろ関係しまして、2人の交流でこれから日韓問題はみんな調律すると思ったんです、そしたら、次の時代になると、それがどうもうまくいかない。そんな政治家にいつまで我々は引っ張られていくかなと、悔しい思いをしまして、それから市民観だということを盛んに言うようになりまして、1998年の10月8日の小淵日本総理と韓国の金大中大統領との間で(作った)日韓共同宣言ですね、あれは今でも読んでみましても、あれはアジアの将来をそのまま声明している立派なもので、それで実際それは古語になって今は顧みない文章になってしましまして、私はこれが非常に惜しいと思うのでありますけど。それで、日本と韓国は経済的にどんどん発展していったですね、今は日本と韓国との間の経済取引は、年間720億ドルを超えていますね。韓国は日本に対して、赤字が年間244億ドルになる、しかし、韓国はそれほど前のように問題にしていらない。それは、非常に恐縮な話であります、中国に対して韓国は905億ドルの取引をしているわけですが、それで韓国側のほうが133億ドルの黒字がある。しかし、グローバルに考えてこれは大した問題ではないというような意味において、韓中関係、中韓関係が続いているわけでありまして。こういうような時代、経済そのものも政治の思惑と関係なしにどんどん発展して、それで世界のなかにおいても最もダイナミックな地域になっているという問題を考えながら、私はこれはひとつの過渡期だと思ってですね、こういう経済的な関係と人為的な交流に対して政治は立ち遅れているんだという立場に私は立って各国の問題を考えているのです。だから、我々は、市民が政治に影響する時代をどんどん作っていかなければならない、こういった意味において、民衆、民主主義というのは成熟の時代を我々は作らなければならないと思っています。それで、そういうような政治も、いつか私はついてくると思うんですね。こういう民間の間の強力な、差し止めることのできない強力な動き、韓国と中国の間でも実際行き来してしているような動き、交流、これは誰も差し止めることが出来ない。これが、政治を動かすような時代になると、我々は思わなければならない。そういった意味で、最後の言葉として、こういうような日本語の教師達が集まって、お互い向上しあっているというのは、まさにそういう時代を作るようなささやかな努力である。だから、これが実り大きいものになって、交流がどんどん広がって、そして東アジアに新しい強力な？を生み出すという、これが我々が目指すべきことではないか。過去の事を問うのではなくて、未来を目指して我々は進みましょう、というようなことを申し上げて終わりたいと思います。

井島先生の感想・要約

池明観先生がおっしゃいたかったことだけ確認します。まず一、序と書いてありますね。ここで池明観先生がおっしゃいたかったことは、日本を含めてアジア、広く言えば東洋は、西洋の考え方に従って、自分の生き方を考えてきたのではないかと書いてあると理解してください。それで、先生は韓国の人です。で、あなた方は教科書でどういうふうに勉強しているかは知りませんが、第二次世界大戦という言葉がありますけれども、これは研究する良識のある大人はこの



言葉は使わないですね。ある人は太平洋戦争といいます、ある人は36年戦争といいます。そのような考え方から、先生は韓国の立場、韓国人として、日本の36年間の侵略の歴史というものをたって先生の意見を言った。しかし、それは突然ではない。昔から日本と朝鮮の歴史のなかにあったということを先生は大事にしながらやさしく、でも結局は日本に対して非常に厳しい意見を発言された、ということを知ってほしいです。その出発点として、一の序の言葉ある。二番目、東アジアの不在の歴史と書いてあります。不在ということは「居ない」ということですね。アジアも東アジアも南アジアも西アジアも、皆違いますよね。何故か、アジアに深い歴史があるにもかかわらず、東アジアというものの存在が非常に薄い、無かったという発言がありました。そのことへの説明を、先生は韓国の立場で、そしてここ中国の立場も理解して発言されました。ですからこの先生の発言はここにいる日本人はかなり厳しく聞いていたはずで、これは、中国の学生、韓国の学生が日本に聞いて言いますが「え？私が自分の国で勉強した歴史と全然違うことをやっている」と。じゃ、何が違うか、そういうことが大事なことで、そういうこともあなた方の勉強のなかで思い出しながら、この池明観先生の言葉を思い出していただければ嬉しいです。それから最後、東アジアの現在をどう見るべきかと書いてあります。ここでは、いかに日本がこれから責任を持ってリーダーシップをとらなければいけないのです。それにしても、日本は何かおかしいんじゃないかですかということも発言されました。この辺があなた方高校生、大学生にとって非常に大事なことなんです。あなた方は将来を作っていく人ですから。かつ、日本語を勉強している人、あるいは日本に関心を持っている人ですから。池明観先生が最後に言われましたね、日本語の先生達の場所でこの発言ができることをとても嬉しく思うと。これを若い人たちは自分のことに置き換えてほしいのです。そこから池明観先生の言葉を、あなたがた10代20代の人たちはどう受け止めるのか。

で、それを10年後20年後にあなた方はこのような会議の場で必ず発言することができると思います。あるいは、経済の仕事、いろいろな仕事をするようになると思います。そこで、是非今日、2006年7月25日、南太平洋で発生した台風が近づくなかあ、あの時池明観先生が言ったことはこうだったなあ」ということを思い出してほしいと思います。今日開会式の時、雨が降っていました。今晴れてきました。天というのは見ているなと最近本当に良く思いますが、池明観先生のお話と共に天から光が差ししてきた。これは大事にしたいと思います。

池明観先生、若者に一言。



私はあんまり世論に惑わされないほうが良いと思います。政治的衝突が起こるとか、いろんな問題が起こると、我々は「この国はダメだ」とか考えるでしょう。そういうふうに考えないでね、人間が交わるということは常に問題が起こるわけです。だから我々が日本と交わっていなければ日本と問題が起こらないんですよ。だから、常に国が集まってくるということは問題がおこることだと。そしてその問題をどう解決するのか。平和的に解決するのか、そうでなければ文章のほうに持っていくのか。こういうことを考えなければ、我々は平和的に解決してほしい。人間関係とはそういうものだと。あんまり問題がおこったことに惑わされないように。問題が起こったけれども、それはしばらくすればまた退いてしまうだろうというようなおらかな心をこれから若い人たちは持つ。そして、我々三国の間における友情をだんだん高めていく。私は、絶対この東アジアにおいて、不幸な時代は起こらないと思います。ますます良い時代になっていくと思います。基本的に東アジアの歴史はそういうふうに動くと思いますから。中国だけが優位に立って支配するようなことはない、あるいは日本が優位に立って支配することはあり得ないんですよ。だから、そうすると、自分の国が発展しながら他社を眺めることのできる新しいリーダーシップ。だから私は言うんですよ、日本のリーダーシップは日本の国民だけを考えたらダメなんです。もうすでにアジアを考えなければならぬ。これくらいの指導者になってほしい。だから皆さんはそうならないといけないんですよ。そうでないとアジアは衝突して何になるんですか。ひとつも利益がないじゃないですか。こんなに今まで、歴史の経験のなかです、衝突して不幸であり多くの犠牲を払ったんですから、これからはそういう時代はつくらまい、これからは平和の時代だと。そこに向けての市民的な覚悟と参加。これがなければならぬ。だから私は政治的問題の衝突が起こっても大したことはないんです。我々がしっかりしていれば何にも起こらないんですよ。だから政治に支配される時代ではなくて、市民が欲することを政治がやらざる得ない時代を我々は作っていくんだというような意気込みで行きましょうと私は皆さんに申し上げたいと思います。どうも失礼致します。